

一日一日を 大事に

タレント
えみりー
さん



福岡のテレビ番組のロケでのひとコマ（上・右）
明るいキャラクターで親しまれているえみりーさん
（撮影協力：FBS福岡放送）



合志市を拠点に タレント活動・子育て

—タレントになろうと思ったきっかけは？

「小学生の頃に、熊本で活躍しているタレントの塚原まきこさん^{つかはら}と出会ったことですね。イベントでファンレターを渡したら返事をいただいたんですよ。その後、文通が始まり、“塚原さんのような仕事に就きたい”と書いたら、“いつか一緒に仕事ができるといいね”と返事が来て。それで、“将来はリポーターになりたい！”と思いました。塚原さんの返事がなかったら、今の自分はいないかもしれません」

—そして、夢が叶ったわけですね。

「そうなんです。福岡の短大時代、オーディションに受かって、『くまもと未来国体（平成11年）』の式典アナウンスもやりました。短大を卒業した後は福岡でテレビ番組に出ていましたが、^{あしきたまち}芦北町にいる両親は見られないので、熊本に戻ってタレント活動を始めました」

—合志市に住み始めたきっかけは？

「合志市出身の夫と結婚したことです。合志市に住んで20年になります。めちゃくちゃ家が増えましたね（笑）」

—住んでみてどうですか？

「熊本市に近いですし、子育てしやすいまちだと思います。自然もあってあまりごちゃごちゃしていないですし、子どもたちが遊べるような場所もあるし。出身地の芦北町と違って海はないですけど、そういうところは似ているかなと。公園も多いですし、子どもたちを遊ばせるにはいいですね」

—仕事をしながら子育てするのは大変ですよね。

「フリーで仕事をしているので、仕事が入るタイミングによって、平日預ける場所、土日預ける場所という感じで、合志市の『ファミリーサポート』で子どもを預けたり、『一時保育』を結構利用したりしていました。『ファミリーサポート』は、合志市に住んでいる人は市から半額助成してもらえますし、本当に助かりました。『病児・病後児保育』もそうですが、合志市は手厚いと思います。欲を言えば...『こども医療費』の助成をもっと早く高校生まで拡充して欲しかったですけどね（笑）」





合志市と市社会福祉協議会が開催した
家族介護教室事業の一環の講演会に登壇。
えみりーさんは多発性骨髄腫と闘病生活を踏まえ
「一日一日の大切さに気づいた」と語りかけました
(令和5年2月19日・ふれあい館)

多発性骨髄腫と向き合う日々 家族・周りの支え 今の思い

—タレント活動と子育てで充実した日々の中、令和元年に多発性骨髄腫になったことを公表しました。

「その年の春先に肋骨が折れて、その3か月後、病名が分かりました。“まさか自分が...”ですよね。まず、肋骨が折れたことが信じられなかったんですよ。で、“子どもを産んで、年齢的なこともあって骨がもろくなっているのかな”という軽い考えでした。それが“血液のがんに繋がる”とは思っていなかったので、二重にショックでした。聞いたこともない病名でしたし、これを相談しても共有してもらえない人もいないと思って、すごく孤独に感じました。ネットを調べても悪いことしか書いていないし...。でも、同じ頃、白血病を公表した競泳の池江璃花子選手や、私と同じ多発性骨髄腫を公表した漫才師の宮川花子さんの姿が希望でした。“がんイコール死んでしまう”と思っていたんですけど、池江さんはきつい治療を耐えて泳いでいるし、宮川さんは“またいつか夫婦で漫才をやる”と仰って、すごいなと思って。“自分だけじゃないんだ、こんなつらい思いをしているのは”と。“自分も前を向いていこう”という感じで、治療を始めました」

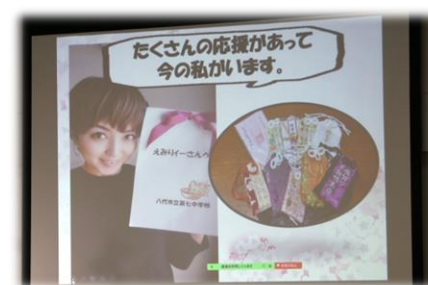


—治療は今も続いているんですよね？

「今も抗がん剤治療を月に1回受けています。完治がないので現状を維持しているという感じですが、今まで5、6時間点滴していたのが、注射で10分、15分で終わるようになったんですよ。この4年間でも変化しているから、今後の医学の進歩を期待して、“いつかは完治できるかな”という希望を持っています」

—病気になった現実を受け入れるには時間がかかったのではないですか？

「でも、自分の性格上、切り替えは早かったかもしれない。うじうじしていても仕方ないし、逆に、くよくよしているところを見せると子どもたちが心配するんですよ。だから、“うじうじしているよりは、楽しく笑っている時間が多いほうがいいよね”って、切り替えるようにしました。子どもたちと楽しんでいたら気分も違うし、知らないうちに病気もいなくなってるんじゃないか、って(笑)。元々、家族の支えがないとできない不規則な仕事をしていたのですが、改めて家族の存在は大きいなと感じました」



—前向きになるきっかけは、他にもあったそうですね。

「私が病気を公表してから、SNSで同じ病気の人たちからたくさんのメッセージをもらいました。実際に闘病しながら“今、熊本城マラソンを目指しています”とか、すごく前を向いて人生を楽しんでいる人ばかりでした。笑い話じゃないけど、“ここを乗り越えるのはきついけど、乗り越えたら怖いものはないから、頑張れ”みたいな感じで。それで、自分も“そうですよね”と。そう励まされた私が病気を公表したことを通じて、がんだからと落ち込むんじゃなくて、“えみりーは病気だけど、普通にテレビに出ているじゃん。普通に仕事ができるようになるんだ、という希望になれたら...”と思いました。それで、抗がん剤の影響によって脱毛したのでウィッグで仕事をしたことや、治療の流れとか、SNSで書いたんです。そうしたら、“私もこうでした”というメッセージをいただきました」



親友でタレント・片山リナさんのお店『Katarina Kitchen』（合志市須屋）をタレント活動のない日は手伝い、気さくに接客

—それがInstagramでのコミュニティに繋がっている？

「そうですね。発病から2年後に、『SUN-ey（サニー）』という名前のコミュニティを作りました。悪性リンパ腫を発病した女性とブログを通じて知り合ったのがきっかけでした。SNSで繋がるだけでも自分自身が励まされてきました。“患者の会”みたいなのは堅苦しくて好きじゃないんですけど、コミュニティを通して知り合い、発信していけば、それを見た人の気持ちが、“自分だけじゃないんだ”、“いいことを書いている”みたいに、前向きになるんじゃないかと。そういうコミュニティを作ったかった感じですね。『SUN-ey』には、“いつも太陽みたいに、明るく笑っていたいな”という思いを込めています。名前にあわせて3月2日に設立しました。フォロワーが400人ぐらいいます。“彼女が乳がんと診断されたけど、どういうことをしてあげたらいいですか？”というメッセージが来たら、乳がん経験者の人たちに発信して、その返事を教えてあげたりとか、交流会を開いたこともあって、“また会えるようにがんばろうね”と励ましあったりとか。交流会には、熊本だけでなく、福岡など遠方からも来てくださったんです。『SUN-ey』は本人だけでなく家族の方も気軽に参加できるようにしています」

—えみりーさんが最初そうだったように、人知れず病気のことを抱え込む人がいるかもしれませんね。

「家族に言わない人もいますんですよ。一方で、経験を生かしたい、話したい人もいます。例えば、“何で家族に言おうと思ったのか？”ということがあれば、そのきっかけを話してもらって、“あっ、そっか”と。悩みを打ち明けたり、自分の経験を話したりするだけでも全然違うし、気持ちがすっきりすると思います」

—改めて今、えみりーさんが伝えたいことは？

「健康診断をしっかり受けて欲しいと思います。自分の家族を守るためでもありますよね。会社員だったら健康診断ってあるじゃないですか。私はフリーで、“40歳になったら受けよう”と思っていたんです。でも、合志市から来る案内も“まだいっか”、“まだいっか”と思って、スルーしていたんですよ。発病した時はそんな感じで、健康診断をきちんと受けていませんでした。早期発見、早期治療で治せるのであれば、早めに行って欲しいと思います。そして、がんをはじめ、若い人の病気も増えていますよね。保険もしっかり見直したほうがいいと思います」

—病気と向き合いながら、これからの人生をどう過ごしたいですか？

「楽しみを持つ。好きなことをする。飲みたい時に飲む（笑）。一日一日を大事にしたいと思っています」

（インタビュー：三宅 合志市広報官）



えみりーさんが運営する
病気の方の支援コミュニティ
『SUN-ey（サニー）』
（Instagram）



お知らせ！

合志市では毎年4月、対象となる方に各種検診の申込書をお送りしています。詳しいことは、広報こうし5月号に掲載予定です。